

幼児の活動

神 沢 良 輔

幼児の活動をどのようにみていくかということは、幼児を指導したり、理解するのにもっとも基本的なことである。とくに現場の保育者は、指導計画の作成などということで、活動を文字化していくことが要求されている。

そこには、いろいろの問題があるが、今回は、幼児の活動を“活動名”で文字化するというのもつ危険性を中心にしてみていくことにする。

まず、その一例として、ここでは、五歳児後半からみられる、幼児のルールのある遊びをとりあげてみよう。

ある保育者は、幼児の活動を、“七、八人のグループでサッカー遊びをする”というように書いたとしよう。しかし、それはサッカーという“活動名”と、七、八人のグループの大きさを示したにすぎない。これでは、幼児の活動とはいえ

ないのであろう。

さらに詳しく、“七、八人の幼児が、二つのグループに分かれ、ボールをけてゴールに入れて遊ぶ”と記したとしよう。ここでは、前者に比して、サッカーという活動名は直接に記されていないが、基本的には変っていないといえる。

それは、幼児のする“サッカー遊び”——こういう表現は妥当ではないが——は、おとなのするサッカーの模倣としてなされるが、その中で幼児に理解できない面を省略して、または、やさしく幼児向きにしたものであろうかということである。

このことについては、幼児の活動を、幼児の発達に位置づけ、幼児から学んでいけないということになるのであるが、“活動名”で書くということは、おとなの側から活動をみて

いくことになりやすい。

いま、これらについて十分にのべる紙数に余裕がないので、「活動名」のもつ問題点の二、三についてみてみよう。

● 競争ということ

サッカーなどのルールのある遊びは、競争ということを前提とした遊びである。しかもそれは、グループ対グループの競争である。だが、幼児は、グループに分かれていても、個と個との競争が中心になる。つまり、自分がゴールに何回けり込んだかということが興味の中心であり、自分の属するグループが勝つということは、あまり関心がない。そのため、ゴールが一つであっても平気だし、二つあっても、自分のグループのゴールを守るといふようなことは、めったにみられない。

グループ対グループで競争するということは、もつとあとの年令である。

● 活動のはじまるまでのこと

ルールのある遊びは一人ではできない。そのため、活動のはじまる前に、友だち集め、グループ分けということが必要になる。このようなことが可能になる以前では、この活動は

始まらない。グループ分けは、ジャンケンなどいろいろな方法でなされるが、実際には、グループの人数の差異はあまり気にしていないようである。それは、前述のように、個の競争が中心になるためである。

しかし、このようなことの可能になる発達の水準が、ルールのある遊びを支えている。

● ルールということ

ルールも、きわめて自由度が高く鬼遊び的である。この自由さが、幼児の活動の楽しさでもある。しかし、このような自発的なルールでも、幼児なりに個人間の共有性がなければ、活動は成立しない。しかし、それは、おとなのするルールのある遊びとは、基本的に構造が異なっているといえる。

このように、幼児の活動は、幼児の全体的な発達からみていかなくは理解することはできないだろう。すくなくとも、「サッカー遊び」といふような活動名からみようとすれば、そこには幼児の活動はないし、幼児の指導はできないといふことになる。

活動名を書くことによって、幼児の眞の活動を見失わないようにしたいものである。

(十文字学園女子短大)